



# 記憶を記録に 私の切り抜き帳Ⅱ



『いつもいちばん食べたいものを  
食べているとは……』

大熊信行氏

石下郁子

## 『いつもいちばん食べたいものを食べているとは限らない』大熊信行氏

---

今から四十何年か前、ある文芸サークルに一度だけ出席した時、その中の一人の人が、新聞に載っていたという一文を紹介してくれました。その時、ずいぶん昔の記事、という印象を受けました。

朝日新聞『きのうきょう』欄に、大熊信行という人が書いた『そろそろ』という記事でした。

いつもいちばん食べたいものを、食べているとは限らない。

いつもいちばん会いたい人に、会えるとは限らない。

いつもいちばん話したいことを、話しているとは限らない。

いつもいちばん書きたいことを、書いているとは限らない。

食べ物のことは妻を失ってからは仕方がない。人に会えないこともやむを得ない。

いちばん話し合いたいのは死生観の問題だが、話題としてそれを好む人に出会うことがない。

ありがとう、ありがとう、よくわからなかったが実にすばらしかった。

そう言って生活と仕事にいとまを告げたい。

君ならどんな挨拶を最後の日にするつもりか、といったことがどうも話題になりにくい。

しかし自分にとって最も痛切なのは次のひとことである。

いつもいちばん書きたいことを書いているとは限らない。

いつも（題と締め切り）を与えられて、書いているだけのことである。

よそから求められたものは原則として断る、書きたいものだけをひそかに書き連ねていく。

そろそろ、そういう生活に移りたい。

ワープロなどがまだ世に出ていなかった時代です。半紙にタイプ印刷し、ホチキスで止めただけのその文芸誌の文字を、当時の私は食い入るように読みました。

まだ若かったのに

『食べ物のことは妻を失ってからは仕方がない、人に会えないこともやむを得ない』という筆者の（少し悲哀を帯びた）思いも、本当によく理解できる気がしたのです。

そのほかの言葉も言うに及ばず、私はすぐに全文を覚えてしまいました。（細かい記憶違いはあるかもしれませんが）

自宅から遠いこともあって、そのサークルに自分は席を置くことなく、『そろそろ』が載っていた冊子もどこかにいってしまいました。しかし一度覚えたその言葉を、今日まで忘れることはありませんでした。

ネットが普及した現代では、昔は簡単にいかなかった筆者についての情報も容易に得ることができます。

大熊信行。経済学者、歌人。1893年生まれ、1977年逝去。

新聞発刊日は1946年6月24日と私の古い記憶は主張しますが、ずっと後になって図書館で新聞の縮刷版をめくってみましたら、その日に該当する記事は見当たらず、日付については記憶違いだったことが分かりました。

けれどもその人が『きのうきょう』という日常の中で、新聞のコラム欄に書き綴ったと思えるあの珠玉のような言葉は、今日まで私の中に記憶としてとどまったのでした。

しかしその言葉は彼の著作として後世に伝えられていくだろうか。今もその言葉を思う人がいるだろうかとこの頃の私は考えます。

同人誌に取り上げた人は覚えているかもしれません。

でも当時の私が古い記事だと思っていたものが、単にその何日か前の新聞記事を引用したにすぎなかったとしたら、その人自身も忘れてしまわれたかもしれない。それ以上に、自分よりも年長だったその人が今も健在でいらっしゃるかどうか……

『そろそろ』という記事を書いた筆者の、誰かと話し合いたかったという死生観とはどんなものだったのか、最後の日にはどんな挨拶を交わしたのか、ふと思うことがあります。

『いちばん書きたいこと』については、彼はその時すでに書いていたのだ、という気がしています。

記憶を記録に・私の切り抜き帳

<http://p.booklog.jp/book/75534>

著者：石下郁子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/thmo2535/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75534>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75534>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ